

Pnin における侵犯と融合

中田 晶子

Pnin (1957) は Vladimir Nabokov (1899-1977) の長編小説の中でもっとも人間的な共感にあふれた作品と言われてきた。*Lolita* (1955/1958) と *Pale Fire* (1962) の間に書かれたこの小説は、ナボコフの英語時代を代表する両作品とは対照的に、いわゆるノーマルな日常的世界を描いている。主人公の亡命ロシア人プニン教授は、Humbert の少女愛や Kinbote の Zembla 幻想といった異常な強迫観念や狂気の妄想とは無縁で、豊かな人間性を備えた人物である。この小説は、暴力的な死に満ちているナボコフの長編の中で唯一「表舞台で誰も死なない」作品でもある (Barabtarlo, 600)。*『プニン』* の売れ行きは好調だったが、書評のほとんどが物語のレベルについてのものだった。ナボコフの他の小説同様、*『プニン』* も複数の読みのレベルを備えているのだが、「プニン教授の悲喜劇の物語」の層がとりわけ明瞭であるために、読者はまずそのレベルに関わることになる。亡命者プニンの体験にナボコフ自身の体験を重ね、さらには人間全体の苦しみの歴史を重ねて見ることも自然のなりゆきであろう。一方、作品の別の層に焦点を当てたその後の批評の多くで指摘されているように、この作品には語り的问题と複数のモチーフのパターン化の問題が存在する。¹ この作品は一見してそう見えるような単純で現実的な世界を描いているのではなく、明確なパターンと隠された複雑なプロットが存在する、ナボコフ的な世界である。

疑わしい語り手や、その語り手が作り出すイメージの反復によるパターンは、メタフィクショナルな仕掛けであり、現実の存在であるプニンとは異質、異次元のものであって、プニンの存在を脅かすものと考えられる。疑わしい語り手は、全能の作者の観点から登場人物の内面にまで立ち入って語りながら、最後の章では一登場人物として現れるばかりか、プニンの職を奪い、定住の夢を破る。分身の主題で言えば、*The Real Life of Sebastian Knight* (1941) において伝記作者が最終場面で自らセバスチャン・ナイトになってしまうように、プニンを消滅させてプニンに成り代わるという語り手の意図も読み取れる。そうした語り手の意図に反して、最後にプニンは語り手から逃れて去る。ここでプニンの逃亡による消極的勝利が、物語のレベルでも作品のヒューマニズムを保証する

2 中田 晶子

ことになるし、語り手のメタフィクショナルな支配に対抗してリアルな存在であるプニンが生き延びるという図式にもなる。このような観点からすれば、「人生によってパターンが破られる」という形で『プニン』の中にヒューマニズムを見るという批評も有効であろう（Bader 86-90）。

確かに『プニン』という作品は、物語と語りの両方のレベルでのさまざまな悪意や迫害に対してプニンが敗北せずサバイバルを果たす作品である。しかし語り手の侵害やメタフィクショナルな仕掛けは、人生対パターンの構図の中でプニンを脅かすだけのものだろうか。これが本稿で考えたいことである。

I

語り手から考えてみたい。語り手がプニンに対してしていることは確かに徹底的な侵害である。語り手によれば、物語のレベルでのプニンとの関係において、語り手は常にプニンの優位に立ってきたことになっている。大学生のプニンは、素人劇で語り手が断った役を演じ、その後語り手の捨てた女性と結婚し、最後は語り手によって大学の職を取りあげられてしまう。語り手が初めてプニンに出会う少年時代の回想の場面でも語り手はプニンに対する階級的な優越感を隠さない。同時に語り手は、物語の上でプニンの人生に対して行った以上の侵害をプニンの物語を語る上でたえず繰り返している。語り手は、プニンに対して絶え間ないプライベートの侵害を行っており、プニンの心の中、記憶の中にまで入り込み、それを暴露する作業を続けていることを誇示する。三人称で語られる小説であれば読者は自然に受け入れることであるが、この小説の語り手は登場人物でもあるので、全能の語り手の地位にいることは不自然である。プニンは、精神分析に反対して「なぜ、人々の悲しみをそのままにしておいてやらないのか。悲しみこそこの世で人間が本当に所有する唯一のものではないだろうか」(52)と主張する。ここでプニンの言う悲しみは、記憶と言いかえることも可能であろう。プニンがただ一度直接に語り手を非難するのも、語り手がプニンの過去を勝手に捏造する、という点に関してであった。また、プニンは物語の中で繰り返し自分の部屋への騒音に悩まされるが、外部からの音の侵入以上に、常時語り手の視線の侵入を受けている。「日常生活ではあまり観察力の鋭いほうではない」(148)と言われるように、プニンは鞆の取り違えから人違いまで「見間違い」にしばしば苦勞する。さまざまな分身が作品の中に現れて彼を悩ますからでもあるが、プニンが観察する側にではなく、一方的に見

られる側にいることをも示している。語り手は、物語の上でプニンの優位に立ち、語り手兼登場人物としてプニンを追いつめて行くだけではなく、初めからその視線と語りによってプニンを支配する立場にある。

他ならぬ侵入者であるこの語り手自身によって、第一章で、人間存在にとっての「分離性」の重要性が語られる。

I do not know if it has ever been noted before that one of the main characteristics of life is discreteness. Unless a film of flesh envelops us, we die. Man exists only insofar as he is separated from his surroundings. The cranium is a space-traveler's helmet. Stay inside or you perish. Death is divestment, death is communion. It may be wonderful to mix with the landscape, but to do so is the end of the tender ego. (20)

プニンの分離性の最大の危機は、物語の最後に訪れる。*The New Yorker* に連載として発表され始めた頃には、この作品は *My Poor Pnin* と題される予定で、最後に「私、VN [Vladimir Nabokov] がプニンのいる大学町 Waindell に赴き、哀れなプニンは死ぬ」ことになっていた。² そうなれば、語り手による最後の決定的なプニンへの侵入、分離性の完全な破壊が行われ、語り手の悪意の企みが完成することになる。分身の主題として見れば、分身が一体となったその時に、片割れであるプニンは消滅することになる。第一章を発表した段階ではナボコフ自身そのつもりだったのだろうし、そうすればここでの語りはその伏線となったはずだが、実際には初めの計画は変更されてプニンは死なず、その存在も保たれる。

プニンの分離性を侵そうとする語り手の企みは、当然プニンにとって危機である。第一章の語り手の言葉の続きにもう一度戻ってみると、この場面でのプニンの存在は、過去の自己と重なることでさらに複雑に危うくなっている。プニンは、原因不明の発作を起こし、自分が周囲の風景と一体化してしまうような無力感に襲われている。同時に、熱に苦しんでいた子供時代のプニンの意識と現在公園のベンチに倒れ込んでいるプニンの意識が重なり合い、公園と子供部屋の光景も重なる。この場面では、二つの時空間と二人のプニンの意識が、それぞれ二重露出のように示される。子供部屋のベッドにいる 11 歳のプニンは花と葉の模様の壁紙のパターンを解明したいと思っていたのだが、大人のプ

4 中田 晶子

ニンもその心の状況をそのままに体験する。

He could still make out through the autonomous garlands certain parts of the nursery more tenacious of life than the rest, . . . but these interfered even less with the oak leaves and rich blossoms than would the reflection of an inside object in a windowpane with the outside scenery perceived through the same glass. And although the witness and victim of these phantasms was tucked up in bed, he was, in accordance with the twofold nature of his surroundings, simultaneously seated on a bench in a green and purple park. During one melting moment, he had the sensation of holding at last the key he had sought; but, coming from very far, a rustling wind, its soft volume increasing as it ruffled the rhododendrons—now blossomless, blind—confused whatever pattern Timothy Pnin's surrounding had once had. He was alive and that was sufficient. (24)

現在のプニンは、発作がおさまりかける「溶け込む」の意味も持つ一瞬にパターンの謎が解けたように感じる。一種のエピファニー的な体験の場面だが、実際には発作が終わると謎の答えはわからなくなってしまう。ナボコフの作品にはこの種の体験が繰り返し現れる。主人公には、そこで暗示されていることは結局理解できないが、隠されている意味があることは感じられる。さらにそれらを隠しつつ示している存在があることも同時に漠然と感じとれるという体験である。この場面はイメージの反復によるパターン化においても重要で、壁紙の模様であるシャクナゲと櫻が公園にもあること、子供部屋の屏風に描いてあるリスと老人の絵が、そのまま現在のプニンの姿とリスに重なること、が指摘されている (Nicol 95-96, Rowe 183-185)。融合の危機が語り手によってことさらに語られるためだけでなく、プニンの知らないところで悪意の策略家 (evil-designer) によってプニンの人生のパターン化が行われていることがわかる。子供時代に壁紙のパターンが解明できなかったように、現在もプニンは自分の人生の隠れたパターンに気づかない。ドラマティックアイロニー的な、また作品の自己言及的でもある場面であるこの部分には、作品中の重要なものが凝縮されている。すなわち、語り手の越権的侵入、肉体的危機を伴うトランス状態の中で見る過去、さらに隠されているパターンが示され、プニンがそれ

に気づきかけるが結局わからないままになるという結末，である。ここではプニンと風景との融合とともに子供時代のプニンとの融合がおきて，プニンは肉体的にも危機の状況におかれる。しかしそれを乗り越えるとプニンには現在に生きる力が再び生まれ，状況を克服する力を得るという意味で，この場面は仮死の体験とそこからの再生の場面でもある。

発作の余韻は，その晩の講演会場でプニンに新たな幻覚をもたらす。講演のために立ち上がったプニンは聴衆の中に生前親しかった人々の幻影を見るが，ここでも公園での発作の時と同様に，プニンの世界の分離性はなくなり，二つの世界の重ね合わせが起きている。

[B]ut while it [a faint ripple] lasted, how limpid the vision was! In the middle of the front row of seats he saw one of his Baltic aunts, wearing the pearls and the lace and the blond wig Next to her, shyly smiling, sleek dark head inclined, gentle brown gaze shining up at Pnin from under velvet eyebrows, sat a dead sweetheart of his, fanning herself with a program. Murdered, forgotten, unrevenged, incorrupt, immortal, many old friends were scattered throughout the dim hall among more recent people . . . And in an inconspicuous situation Dr. Pavel Pnin and his anxious wife, both a little blurred but on the whole wonderfully recovered from their obscure dissolution, looked at their son with the same life-consuming passion and pride (27-8)

この場面は，先程の公園での子供時代のよみがえりよりもさらに鮮やかに亡命者としてのプニンの背景を見せている。この幻影は地方の婦人クラブの司会者の，脱線ばかりで間違いだらけの紹介に重なって起きる。その紹介は短いながらも，アメリカにおけるプニンの待遇の簡潔なスケッチにもなっている。ナボコフ自身が嘆いていたように，プニンの名前はアメリカ人には正しく発音されないし，経歴についての紹介も類型化されている。そしてその紹介の間，プニンの周囲には多くの死者たち 殺され，忘れられ，恨みも晴らされず，不滅の友人や父母 が現れて彼を見守り，励ます。プニンの時に滑稽な外見の裏側に悲劇的な過去があることが示される。これは亡命者の典型的な物語とも読めるが，ここではそれが決して過去の物語としてではなく，今も過ぎ去らない過去として現れている。死者たちはプニンの世界を侵しつつ，彼らの世界とプニン

6 中田 晶子

の世界が重なるところに現れる。

ここで一瞬姿を現す恋人は、第 5 章でもう一度よみがえり、プニンにとっての記憶の意味をさらに明確にする。

. . . if one were quite sincere with oneself, no conscience, and hence no consciousness, could be expected to subsist in a world where such things as Mira's death were possible. One had to forget – because one could not live with the thought that his graceful, fragile, tender young woman with those eyes, that smile, those gardens and snows in the background, had been brought in a cattle car to an extermination camp and killed by an injection of phenol into the heart, into the gentle heart one had heard under one's lips in the dusk of the past. And since the exact form of her death had not been recorded, Mira kept dying a great number of resurrections, only to die again and again, led away by a trained nurse, inoculated with filth, tetanus bacilli, broken glass, gassed in a sham shower bath with prussic acid, burned alive in a pit on a gasoline-soaked pile of beechwood. (135)

ここでもプニンは周囲の風景に同化してしまいそうになる発作と共にかつての恋人である Mira の幻影を見る。マイラは Buchenvald の強制収容所で殺害されたが、その死の状況がわからないことから、プニンの心の中でさまざまな仕方での虐殺が繰り返される。プニンはマイラの死が許される世界では生きていけないために、マイラを思い出すことを自分に禁じている。読者はこの場面によって、プニンにとって本当の「運命の女性」(the fatal woman) は、別れた妻の Liza ではなくマイラ(この二人の名前は子音を入れ替えるだけである) であったことを知り、なぜマイラのことがかこれまで隠されてきたのかを知る。マイラを思い出すことは文字どおり命にかかわることであり、何としても避けなければならない。プニンの過去がこのように幻影としてよみがえる時、なぜいつもプニンが肉体の危機に襲われるのかもこれで理解できる。マイラのような死はとうてい容認できるものではなく、プニンが良心ある人間としてこの世界に生きて行くには、その死を「忘れて」いるしかない。しかしプニンが思い出すことを自分に禁じている限り、マイラの死は永久に現在の出来事であり続け、プニンの生命はその記憶によって危機にさらされることになる。プニンの記憶

のよみがえりは、単に過去の現在への越境であるだけでなく、同一平面上には存在不可能な二つの世界　マイラの死が可能である世界とプニンが生存できる世界　が同時に存在するために危険なのである。プニン自身が小説の中で言うように「悲しみこそ人間の所有する唯一のもの」でありながら、プニンは死の恐怖をはらむ融合にさらされなければ、それに触れることができない。皮肉にもプニンの真の世界、彼が唯一所有する記憶の世界はプニンの存在を脅かし、プニンの戻る安全な世界は敵意や俗物性に満ちたアメリカの生活である。

繰り返されるマイラの虐殺のイメージは十分に「物語化」されているとも言えるだろう。プニンが体験する様々な彼女の死は、まさに強制収容所における典型的な死、類型としての死なのであるから。しかし逆に、ただ一度の真実の死の瞬間を奪われ、「終わりのない死」とならざるを得なかったことによって、マイラの死はやはりプニンを脅かす「禁じられた記憶」となっている。この場面で自らの真の世界に触れた後、プニンは再び融合の危機を乗り越えて生き延びる。

ナボコフの作品全体を貫く「別世界」の主題は『プニン』においては「死者の世界」として、作品の一つの中心として示される。外に現れたプニンの内部とも言うべきその世界は、登場人物としてのプニンの背景であり、その存在により深い意味を与えている。さらに、それは彼の存在の危機をもたらすと共にプニンを再生させる役割を担っている。これらの繰り返される仮死と再生は、いわば最終的なサバイバルのリハーサルであり、プニンがこの作品を、物語と語りの両面において生き延びるといふ本当のサバイバルに向けて積み重ねられていく。もし予定通り、最後にプニンが死ぬのであれば、これらの場面は死への伏線、究極的な融合　おそらくは分身である語り手との　のリハーサルとなるところである。これらの場面の意味は両義的であり、最後のサバイバルによってこれらの境界侵犯の意味が最終的に決定されることになる。

II

もうひとつの融合の現象が、語り手に支配されるこの小説を生き延びる力をプニンに与える部分を見てみたい。Victor がプニンに贈ったガラスのボウルについての描写である。ヴィクターはプニンの本当の息子ではないが、ライザの強引な依頼によって、プニンは後見人となって彼に対して経済的な援助を与え、文通を続けている。彼らは *Ulysses* の Bloom と Stephen にたとえられるような

精神的な父子関係にあってお互いに好意を抱いている (Gordon 151-152)。しかし 14 歳のヴィクターとプニンの実際の出会いはいくつかの齟齬があり、二人が期待していたほどうまく行かない。一方で夢や空想の世界で二人は共感によって結びついている。夢の共有は *Lolita* においてはハンバートによって「真実の愛の証」として語られているが、この二人もそれとは知らずに同じ夢を見ている間柄である。

ヴィクターから贈られたボウルには、ヴィクターのプニンに対する感謝や好意を超えたところで、二人の精神的なつながりを見ることができる。このボウルに物質と精神の世界の間での融合が起きていることが語られるからである。初めにプニンの眼に映ったのは、実体としてのボウルではなく、贈り主ヴィクターの心の美しさを映し出している輝きであり、物質としての美しさは後で見えてくる。

The bowl that emerged was one of those gifts whose first impact produces in the recipient's mind a colored image, a blazoned blur, reflecting with such emblematic force the sweet nature of the donor that the tangible attributes of the thing are dissolved, as it were, in this pure inner blaze, but suddenly and forever leap into brilliant being when praised by an outsider to whom the true glory of the object is unknown. (153)

この章の最後でこのボウルが割れずに残ったことが、大学の職や家を失っても生きていく力をプニンに与えるとしてこれまでの批評でも重要視されてきた。このボウルのエピソードにおいて、リス、水、シンデレラ、といった複数のモチーフが作り出してきたパターン、そして父と息子の主題がひとつに収斂する。さらに私はここでボウルそのものにも複数の次元における融合の現象があり、そのためにこのボウルがプニンにサバイバルの力を与え得ると考える。失職のニュースを知らされた後でプニンがこのボウルを洗っている時、うっかりしてクルミ割りを洗い桶の中に落としてしまう。ボウルが割れたことを確信した彼は、失望のため、一瞬大変年老いて見える。この場面に語り手のことさらな悪意の表われを見て、プニンと読者の両方の感情を弄ぶものであるという解釈もなされているほどである (Maddox 147)。しかしこの場面でプニンの上に現れる衰えは、融合から力を得る時にプニンに起きる肉体的危機のヴァリエーション

だとも考えられる。彼が洗い桶から無傷のボウルを取り出す時に割れたガラスのかけらで手を傷つけるところも同様である。

さらにこのボウルには間接的なライザの関わりも見ることができる。³ ライザは、プニンを裏切り続けた利己的な女性である。精神分析医である上に二流の女性詩人でもあるという組み合わせは、ナボコフの世界では最悪の存在を意味する。Anna Akhmatova の模倣である彼女の詩や、愛人であった語り手が陰で手を回したため *The New York Times* に批評が出たことを彼女が無邪気に喜ぶ場面には、語り手のみならず、女性の作家や詩人への評価が厳しかったナボコフ自身の冷笑すら感じられる。⁴ しかしライザについて初めてプニンの視点から語られる文章は、このボウルの描写に類似した性質を含んでいる。

There are some beloved women whose eyes, by a chance blend of brilliancy and shape, affect us not directly, not at the moment of shy perception, but in a delayed and cumulative burst of light when the heartless person is absent, and the magic agony abides, and its lenses and lamps are installed in the dark. Whatever eyes Liza Pnin, now Wind, had, they seemed to reveal their essence, their precious-stone water, only when you evoked them in thought, and then a blank, blind, moist aquamarine blaze shivered and stared as if a spatter of sun and sea had got between your own eyelids. (43-44)

ここには、ガラスボウルについてと同じように、物質と精神の融合が語られ、また真にそこにあるものが後になってから見えるという「時間差の認識」が含まれている。ボウルと同じ色合いの美しい「アクアマリンの眼」を持つライザは「盲目」であり、プニンの真価がわからない。普通の人間には判別できない「影の色合い」を、子供でありながら見分けることのできたヴィクターとの対照もここには含まれている。現実のライザはプニンが認識しているように「不純で、冷酷で、あさましい幼稚な心」(58)の持ち主であり続け、物語の上ではこの後もプニンと新たに精神的な絆を作ることはない。しかしプニンが愛すべきものをその中に認めて献身の対象としたライザからの助力が、彼女自身はまったくあずかり知らぬところで、ヴィクターを経由して、アクアマリンのボウルとしてプニンに届き、それによって彼は力を得て、最終的なサバイバルを果たすことになる。小説の最後でプニンの乗った車を見送る語り手は、「どの

ような奇跡も可能であるような金色の霞の向こうへ」(191)去った、と語る。ささやかではあるが、彼の生存を支える重要な奇跡がすでにプニンに起こったことを私達は知っている。

『プニン』における融合の主題は、その両義性と切り離すことができない。融合は時には外部からの悪意ある力の侵入であり、時には複数の次元の溶解によって主人公の存在を脅かすが、同時に主人公を支え、生き延びる力を与える。それはそのまま、ナボコフの複雑なパターン構築が作品の中で持つ意味につながっている。技巧に満ちたナボコフの作品は時に「非人間的」と評されるが、ナボコフの小説において人間性は、人工的な仕掛けと対立するものではなく、現実と人工的な構築物との複数の次元における相互作用によって支えられているのである。

*本稿は、1994年10月に愛知学院大学においておこなわれた日本アメリカ文学会第33回全国大会における口頭発表「正と負の境界侵犯 *Pnin* について」に大幅な加筆修正を施したものである。

Notes

- 1 『プニン』におけるモチーフのパターンについて論じた批評の主なものとしては、Bader 86-93, Boyd 282-285, Connolly 197-207, Nicol 95-99, Rowe 182-190, Stuart 155-157 がある。語り手について論じた批評の主なものとしては、Field 131-137, Grabes 46-51, Grams 193-202, Maddox 88-102 がある。
- 2 Pascal Covici に宛てた 1954年2月3日付けのナボコフの手紙による (Nabokov, *Selected Letters* 143)。
- 3 ライザとグラスボウルについて論じた以下の部分は、研究ノート “Rose and Aquamarine: Liza in *Pnin*” として発表したものの一部に加筆したものである。
- 4 アフマトヴァは、この小説に出てくるライザの詩が、彼女の初期作品の巧妙なパロディであることに傷ついていたという (Boyd 276n)。

Works Cited

- Bader, Julia. *Crystal Land: Artifice in Nabokov's English Novels*. Berkeley: U of California P, 1972.
- Barabtarlo, Gennady. "Pnin." In *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrov. New York: Garland, 1995. 599-608.
- Boyd, Brian. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton: Princeton UP, 1991.
- Connolly, Julian W. "Pnin: The Wonder of Recurrence and Transformation." In *Nabokov's Fifth Arc: Nabokov and Others on His Life's Work*. Ed. J. E. Rivers and Charles Nicol. Austin: U of Texas P, 1982. 195-210.
- Field, Andrew. *His Life in Art*. Boston: Little, 1967.
- Gordon, Ambrose, Jr. "The Double Pnin." In *Nabokov: The Man and His Work*. Ed. L. S. Dembo. Madison: U of Wisconsin P, 1967. 144-156.
- Grabes, Herbert. *Fictitious Biographies: Vladimir Nabokov's English Novels*. Hague: Morton, 1977.
- Grams, Paul. "Pnin: The Biographer as Meddler." In *A Book of Things about Vladimir Nabokov*. Ed. Carl R. Proffer. Ann Arbor: Ardis, 1974. 193-292.
- Maddox, Lucy. *Nabokov's Novles in English*. Athens: U of Georgia P, 1983.
- Nabokov, Vladimir. *Lolita*. New York: Vintage, 1989.
- _. *Pale Fire*. New York: Vintage, 1989.
- _. *Pnin*. New York: Vintage, 1989.
- _. *The Real Life of Sebastian Knight*. New York: Vintage, 1992.
- _. *Selected Letters 1940-1977*. Ed. Dmitri Nabokov and Matthew J. Bruccoli. New York: Harcourt Brace, 1989.
- Nakata, Akiko. "Rose and Aquamarine: Liza in *Pnin*." *The Nabokovian* 48 (2002): 15-19.
- Nicol, Charles D. "Pnin's History." In *Critical Essays on Vladimir Nabokov*. Ed. Phyllis A. Roth. Boston: G.K. Hall, 1984. 93-105.
- Rowe, William W. "Pnin's Uncanny Looking Glass." In *A Book of Things about Vladimir Nabokov*. 182-192.
- Stuart, Dabney. *Nabokov: The Dimensions of Parody*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1978.